

ベル・エポックのイタリア閨秀作家とその作品世界

ネーラ Neera [アンナ・ラディウス・ズッカリ Anna Radius Zuccari] (1846-1918) 著
アルバム
 『結婚写真帖 FOTOGRAFIE MATRIMONIALI』 (N. Giannotta, Catania 1900) 邦訳 (その1)

清 瀬 卓

〈Sommario〉

Le attività letterarie delle rinomate scrittrici italiane della Belle Époque si svolgevano ovviamente in collaborazione con le varie riviste e con i giornali più venduti, soprattutto in grandi città come Torino, Milano, Firenze e Roma. Ma anche nei salotti che le donne colte organizzavano a casa propria, invitandovi sia intellettuali borghesi che rappresentavano la classe dirigente, sia artisti di ogni genere. Ecco che divenivano sempre più importanti le iniziative delle così dette *salonnières*, che intendevano discutere ogni genere di problema sociale incombente, e inoltre stabilire nella società in cui vivevano un nuovo sistema ideale, indispensabile per la felicità e la libertà dell'umanità. Anna Radius Zuccari, detta Neera, una delle *salonnières* milanesi, si è cimentata fin da giovane in ogni genere letterario sia in versi che in prosa (romanzo, novella, racconto ed anche saggio) per giungere infine a genere moralistico dell'aforisma, reinterpretando la tradizione letteraria dei *moralistes* francesi, quali Michel de Montaigne, Blaise Pascal e La Rochefoucauld. Nel capitolo del dramma *FOTOGRAFIE MATRIMONIALI*, intitolato *Farfalle nere e farfalle bianche*, appare uno spiccato ritratto della nostra scrittrice, che sapeva osservare, con un acuto spirito di critica, non solo la *vita activa*, ma anche la *vita contemplativa* e persino quella intima del tempo.

カラスアゲハチョウ モンシロチョウ
 烏揚羽蝶と紋白蝶 (*Farfalle nere e farfalle bianche*)

1. 女性にとって初めての愛人は、系図の始祖のようなものである。他の愛人は、みな彼次第である。彼が不運なら、他の愛人たち全員が彼に仕返しして、彼を嘆かしめる。彼がみすぼらしければ、他の愛人たちは彼をしかるべき地位に戻す。いずれにしても、彼が試金石となる。女にはこれらの違った指輪を結びつける特異な能力が具わっていて、多くの場合、かかる指輪が彼女たちの宝石箱の一番結構な首飾りネックレスを作り上げている。

2. 男より女の方が恋愛の作法を心得ていると言われてきた。大抵は、男が一滴の雫しずくに濃縮するものを、女が大きなコップで希釈きしゃくする能力を持つからである。

3. 思考が男を高め、感情が女を高める。結合すると、最高度の完成に達する。ヤコブの階梯^{はしご}に似て、かかる完成に住みつくのは天使だけである。

4. 言うまでもなく、気配りは、男にとって一番大きな恋愛の試練である。かかる試練は、困ったことに、いつも絶賛されるわけではない。

5. 美貌に関するかぎり、女は誰しも内心は自身に具わる美しさだけを認めている。

6. 感情の欠乏の結果とされる〈アイロニー〉は、大抵の場合、正反対の原因に由来する。〈アイロニー〉は、凍りついた涙でできている。

7. 恋愛を経験し、深く愛されたことのある女は、老年になるまで身辺に焦げ臭い匂いを漂わせている。その匂いを利用して、錆^{しのぎ}を削る幻想を懐き続ける女は多い。

8. ヒトにとって病気につきものであるように、残念ながら嫉妬^{ジェラシー}は、恋愛につきものである。人生の極意が不幸から解放されることであるように、恋愛の達人は、猜疑心^{さいぎしん}から解放されていなければならない。

9. 幸福に到達することが、恋愛の最終目標ではない。恋する者は誰しも、むしろ好奇心が旺盛である。

10. 女が自分本来の気持ちをあからさまにしないのは、偽善からではない。それは恥じらいからである。かかる繊細さは、崇高な詩人の了解するところであった。彼は、次のような人口に膾炙^{かいしや}した詩句を主人公の口を借りて吐露したものである。《愛おしく、秘められた孤独な配慮を、太陽は知らない。我が胸を焦がす配慮に生きるのだ。》

11. 虚栄心が強く軽薄な女は、婦人帽か肩掛けの^{シヨール}のように恋愛を身に^{まと}纏う。そして、七面鳥が尻尾を見せびらかすように、感情を誇示する。

12. 巧言令色少ナシ仁。

13. 嫉妬深く隠され、秘められた恋には、海底の^{フローラ}植物相のような神秘的な功德がある。動物的生命の芽を取り込みながらも、花卉と茎に花をいっぱいにつけてゆく。

14. 〈理想像〉ということばは、一個人の最高度の^{あこがれ}憧憬を指すために使用される。しかし、ある人の最高は、時として他の人の最低であることを忘れてはならない。

15. 完璧の道は、誰しもが目的地を意識できるまっすぐな日の当たる^{こみち}小径ではない。むしろ傾斜が急で凸凹だらけの暗い^{ひたい}路地で、しばしば額をぶつけ足に切り傷を負いながらも、手探りで前進しなければならない。

16. ^{ダーム・ギャラント}玄人女と経験を重ねて、女を知っていると思い込んでいる男たちを見ると、わたくしはとある街の病院を訪れた後で、そこの住人がことごとく病人だと結論したく思う旅人のことを想起する。

17. 悪徳と醜悪の寄せ集めを現世だと主張する人々は、宗教や科学や芸術をうち建てたこと——もし人間がことごとく^{エゴイスト}利己主義者で背徳者で愚か者であったならば、可能とならなかった事業を成就したことを忘れてしまっている。

18. 共感という崇高な源泉を知らない一部の男たちは、破滅した女たちのために取っておくことができるほんの僅かのものすら浪費する。わたくしに言わせれば、干乾びた一切れの^ぼ麵麩を、みすみす犬に投げ与えてしまったようなものである。

19. 女は男に向かって、彼の立つ瀬がまだ残されているならば、チンピラとか野蛮人とか無礼者とか偽善者などと言うことはできる。ところが、彼のことを白痴と罵れば、もうおしまいである。

20. 嵐のなかで、より雄弁な存在は雷鳴だが、恋愛では沈黙である。

21. 人の顔が相似^{あい}ているように、恋愛も相似^{あい}ている。ところが、どの顔にも固有の表情が具わっているし、どの恋愛にも固有の感情がこもっている。

22. 表情というものは、美全体からすれば、その半分に過ぎない。恋愛感情こそは、美しさの全部である。

23. 俗に決闘と称される面子^{めんつ}の勝負では、双方は当初は殺しあいを演じるが、やがては抱擁しようとする。恋愛では、決闘は時としてもっと真剣なもので、当初は抱きあうが、やがて殺しあう。

24. 文法では、〈一度も〉とか〈常に〉とかは、全時制を表す副詞である。恋愛では、現在時制しか表さない。

25. 貞節は、美德と称されるためには、相応しい対象にめぐり合う必要がある。過ちを悔い改めることは、貞節^{こたわ}に拘るよりも、ずっと見あげた逆^{ケース}の症例になる。

26. 成功は、凡才が取り返しのつかない過ちを犯す暗礁であるからには、才能の試金石である。

27. どうして社会主義の偉大な理想像を描かないのかと、著述家に訊ねる人々がたくさんいる。

無産階級を題材にした長編小説^{ロマンス}をなぜ書かないのかと。そのような質問は、どうして私を愛してくれないのかと、男に言い寄る女と同じ印象をわたくしに与える。

28. たまたま無関心な人の耳に入ると、無意味に響く崇高なことばが存在する。聞き耳を立てている人には崇高に思われる実に空疎なことばだって存在する。

29. 自尊心というものは、心と頭脳とを適正に仲裁しなければ、グラスの下に零れ落ちる^{こぼ}三鞭酒^{シャンパン}の泡のような危険を犯すことになる。

30. 人間と神を選ぶ余地がある場合、^{けだもの}獣を愛することは、名誉になることでも役に立つことでもない。

31. 適宜に苦しい思いをさせるすべを心得ていることは、愛されるための秘訣のひとつである。

32. 女に欠かせないものが、3つある。^{アドヴァイザー}愛人と主人と助言者である。想像力のためには愛人が、感覚のためには主人が、心のためには^{アドヴァイザー}助言者が必要である。

33. 男のなかの最高の見者には、彼の人生で、眼が情念の^{ヴェール}面纱ですっかり^{おお}覆われてしまうような日が存在する。

34. 一度も涙したことのない女は、女として半人前である。

35. 美人なら、男たちのなかに敵をつくる覚悟をしなければならない。男は言い寄って来るが、そうなると、二人の女のひとり、彼になびいて恋の危険を冒すか、彼を^{こぼ}拒んで仕返しをされる危険を冒すことになるからである。

36. 同性に好かれるような女は、概して男に好かれぬ女である。

37. 才能は褒め讃えられ、美しさは好かれ、愛らしさは人を魅了し、善良さは人の同情を買い、思慮分別は人を納得させる。しかし、かかる資質をバラバラにすると、そのどれひとつとして、好意と謂われる神秘的で包括的な感情をかき立てるに充分ではない。このことは、自然の秘密である。

38. 憎悪する段階を通り過ぎる前に、無関心にいたる恋は、ふがいない恋である。

39. 恋は長続きしない運命にある。息を吹きかえすと、もっと厄介である。

40. 理想の恋は存在する。だが、抱きしめることも、繋ぎとめることも、永遠に保持することもできない。ただ一瞥に、握手に、涙に、微笑みに、恋を飲み乾すことで我慢しなければならない。逃げ去る瞬間に、心が震えて過ぎ去ってゆく胸の高鳴りに。それ以上の何もない。

41. 感情は獣じみた本能を超えて長続きする時、最高の繊細さを獲得する。ちょうど香油が入っていた古代壺に、かすかに馨だけが残るように。

42. 百人いれば、そのうち5人は恋に無関心である。45人は、できれば恋をしたいと思う。29人は実行に移す。20人は成功するものと信じている。1人が恋を成就する。

43. 我々誰しもが嘔みしめることになる唯一の幻滅は、自分自身に対して味わう幻滅である。

44. ホンモノの恋は、階段のない邸宅のようなものである…上がってゆこうとすれば、翼が必要になる。

45. ホンモノの接吻は、求めることも奪うこともしない。それは、長らく抑えられていた二個の欲望がひとつとなった抗し難い衝動にちがいない。

46. グッと我慢し、抑え込み、秘めおかれたすべてのものは、やがては恋に有利に作用する。

47. 好感は、一瞬のものでありえるが、ホンモノの偉大な恋というものは、確かめるために時間を必要とする。

48. 見つめあい好感を懐き所有しあうだけで、それ以外のことをしない人々は、恋を手に入れたと言うこともできるが、同時にケーブルカーでアルプス連峰を踏破する旅人にすぎない。彼らは山を知らないままに頂に^{いただき}着いている。

49. 恋は、飢えても消化不良でも死んでしまう。すべては、何が最善の死に方であるかを知ることにかかっている。

50. 恋には、3つの段階がある。第一段階は、《愛している》ということだが、両人の口から同時に出てくる時、第二段階は、一方が《愛している？》と訊くと、他方が《^{イエス}諾》と答える時、第三段階は、《愛している？》との問いに、《判っているくせに！》との返事が返ってくる時である。

51. 愛し合う二人のうち、一番強いのは、相手ほど惚れ込んでいない方である。

52. こと女を話題にする時、男たちが善意の籠ったことばの意味を如何に取り違えているかを観察するのは興味深い。彼らにすれば、かかる許諾は決して善意から行われるものでなく、せいぜいのところ好意からだということをよく考えてみもしないで、恋に応じてくれる女が善良なのである。

53. 馴れ初めを分析してみようとしても、所詮はせん無しよせんいことである。どれほど、またどのようなに愛しているかは言い当てることができても、なぜなのかは判らない。

54. 世の中は、貧しい者や醜ちえい人や智慧遅れの人々で溢あふれている。だから、富や美貌あるいは才能に恵まれている者は、何としてもこうした恵まれない人々に対して赦ゆるしを乞うように努めなくてはならない。

55. 無知な一部の人々が、優れている者たちに抱く興奮の寄って来るところは、次のような事情を踏まえているからに過ぎない。すなわち、優秀な者が自分たちを兄弟扱いしてくれたからというのである。

56. 多くの好運を手に入れた女は、もし嫉妬に苦しめられなくなければ、少なくともうわべはかかる好運にめぐり合えない女たちと同じ状況に置かれていることを示すために、できるかぎり手に入れたものを隠すようにするとよい。

57. 宗教にしろ、道徳モラルにしろ、社会にしろ、家族にしろ、自然そのものにしろ、これらが女に対して求めることのすべてを考えると、結果的には、こかっぼ喝破せざるをえなくなる。いずれにしても、男の誰ひとりとして、できれば女などにはなりたくないのだと。

58. 太陽は昇りもしなければ沈みもしないことが実証済みであっても、太陽は昇ると言われるように、か弱き性のことがなおも話題にされる。

59. 詩人たちは、確かに恋を語るに長けている人々である。しかし、上手に恋をする人々ではない。

60. 恋では、抱くよりも、咬かむことが多い。情愛の籠こもったことばは、何か憎しみに似たような

酷薄なもので絞め殺されることが多い。

61. 自己愛を助長した人は、本来の恋ができなくなる。その実例—食いしん坊、野心家、けちん坊。

62. 恋する人に無神論者はいない。改宗したばかりの人か、改宗可能な人がいる。

63. 恋の蒸留装置は2種類の味がすると言うことができよう。上澄みの甘さは、理由はどうであれ、腐敗する。澱の苦味は速やかに上昇する。

64. あらゆる情念は似たもの同士である。我々がそこで味わう悦びは、自分たちが故意に味付けしているものにすぎない。

65. 裏切り行為で、一瞬にして恋が冷めてしまったと人は言う。そうした時、わたくしはシンナーの効果で消えても、半時間経つとまた出現する染みのことを考える。

66. 純情な人は、恋をするとすべてが薔薇色になると信じている。かりにも思わず微笑みが零れてしまうと同等に、滂沱の涙を流さないで済む恋などというものは、この世に存在しない。

67. 恋というものは、日本の玩具に似ていることがあまりに多い。また別の箱が出てくるかと思えば、また他の箱が、さらにまた別の箱がといった具合に、10個とか15個の箱は、サイズがどんどん小さくなって、しまいには中に薔薇の蕾1個すらも入らないほど小さな箱になってしまう大きな重箱のようなものである。

68. 理想とは、単に遠くに見えるものにすぎない。

69. 美德は、恋の力を増強する。すべてが偉大である恋は、偉大な魂のなかに無造作に芽生えてくる。

70. 何日も雨が降り続いた後は、石畳の舗道の砂利は塵芥が流されて、すっかり綺麗になるものだが、その時、石英や御影石やシリカが混ざっていることを初めて知る。涙というものも、心を洗い清めて、そのよい部分と悪い部分とを浮き彫りにしてくれる。

71. 恋というものを、誰もが近づくことのできるありふれたことと見做すのは、大きな過ちである。むしろ、崇高な宗教的神秘を遂行する心構えがなくてはならないだろう。

72. 宗教の最高段階は、いつも信仰が愛を勝ち得る段階である。愛の最高段階は、敬愛感情が宗教的になる時である。

73. 異教徒たちは、愛の女神から愛を芽生えさせることで、多くが達成されると信じている。キリスト教徒たちは、そうした段階に留まらない。彼らは愛というものを、神から直接に引き出してくる。

74. ある種の女性たちのことを、女たちは率先して悪く言おうとする。女性一般については決してそうではない。この点では、男性はもっと寛大である。彼らは、同性のことも個々人も庇う。

75. 感じが悪い人たちは、大抵の場合、率直なのである。嘘をよろこんでつくだろうことは、容易に察しがつく。好感が持てる人々では、同じような確信は持てない。光るもの必ずしも黄金ならずを覚えておくとよい。

76. アルプス山麓には、当然のこと小ぶりの野薔薇の花が咲く。薔薇のうちは、色といい形といい

い鮮度といい、園芸品種の薔薇と遜色がない。ただ開花する段になって、貧相な花卉は芳香を欠き、すぐに色褪せることを暴露する。然らば、薔薇とは、〈番茶も出花〉を心得ている女性のようなものであろうか？

77. 恋の最大の魅力をなすものが、はたして示される好感であるのか、あるいは心に生じる好感であるのかを、しかと明らかにすることができたためしはない。

78. こせこせした愛—かかる感情の偶像是、感じやすい女性の反感を買う。偉大な愛は、それ自体にみずからの無罪を見出し、他者に対して身の潔白を証明し、しばしばその当事者に報いてくれる。

79. 感じやすい魂は、日頃から、何とひどい愛の浪費をやっていることであろう。そして、かかる浪費をかき集めて、関心を示さない人々の利益に還元することができれば、社会の均衡にどれほど有利に働くことであろう。

80. ある人物の性質のみが気に入る場合、重要なのは単なる賞讃のことばである。ところが、〈痘痕も髭〉となると、水や父親や…

81. 諾否は、恋愛でいつも同じ意味を持つとは限らない。納得していない承諾もあれば、肯定し、確認し、再度確認済みの否認もある。

82. 恋の色合いは、色彩に優る。

83. 女は葡萄酒と似たところがある。良質ならば、熟成するに従って、芳醇になる。変質し易い宿命は、葡萄酒も女も同じである。

84. 女は感覚でものを考え、心で愛し、想像力で苦められる。

85. 好感を決定付けるものは、おそらくある特定の資質が突出しているからでもなく、ある種の欠点がないからでもない。

86. 平凡なことば——《^{パン}麵麩と^{チーズ}乾酪と靴と》を口にして、愛されている人物が、^{きざ}気障に理想を語ってみせる時期がある。また、《恋と光と人生と》といった文句が、彼の口のにほると、俗っぽく拍子抜けしたように聞こえる時期がある。最初の時期は、^{こと}ひと言ですべてが理解される段階である。第二の時期は、^{ページ}百の頁を費やそうとも、何も説明できない段階に対応する。

87. すべて愛の営みを妨げるものは、親密さである。ところが、その直接的な目的も存在するように、悟りの起源をさがす必要があるのは、まさにかかる親密さなのである。

88. 男性にあっては、自己愛が恋に優先する。女に^{いくたび}幾度か譲歩するよう見えたり、頭を下げるとすれば、それはただ^{のど}喉の^{かわ}渴きのために、^{かが}泉に^{かが}屈んで水を飲もうとするような場合に限られる。

89. 想像を^{たの}愉しむという^{きとく}奇特な趣味は、他の男たちに比べて彼らが優れている証拠である。

90. 男女関係には、ことばの意味がひっくり返ることが^{ひんぱん}頻繁にある。〈理解する〉ことは〈感じる〉ことを意味し、〈信じる〉ことは〈願う〉ことを意味している。同じ過程によって、〈美〉というものは〈欲望〉に相当し、〈理想〉は〈神秘〉に、〈熱情〉は〈抵抗〉に、〈^ゆ愉悦〉は〈^{えつ}新鮮さ〉に相当する。〈恋〉ということばが〈恋〉とぴったり一致していることは、ほとんどない。

91. 必ず相手を苦しめることになるのは、恋の悲しい必然である。直接でなくとも、間接的にそうなることがあり、しかも避けようがない。

92. 恋は世間という舞台に立つと、まるであらゆる役を演じる役者のようなものである。ある時は王様の役を演じるかと思うと、また奴隷の役を、はたまた暴君の役を、転じて犠牲者の役まで演じる。しかも、笑劇ファルスであろうと、喜劇コメディであろうと、悲劇トラジエディーであろうと、等しくしくじることがない。

93. 恋愛関係では、編み物の作業中と同じ事態が生じる。ほころびがひとつ生じると、間髪かんぱつを入れず繕つくろう必要がある。そうしないと、折角せつかくの仕事全体が台無しになってしまう。

94. どのような人間にも、鷹揚おうような面がひとつはある。利害関係が生じなければ、我々は誰でも鷹揚おうようでいられる。

95. 最高の犠牲は、その意味がつかめない犠牲である。

96. 甲革アッパーより靴底が、あるいは靴底より甲革アッパーが、先に駄目にならない履物というものは稀である。一方の側か他方の側が二重縫いしてなければ、気難しい二人の意見の一致では、決着を見ることが稀である。

97. ひとりぼっちの時ほど、詩人が良き伴侶はんりよになることはない。

98. 禁じられた恋というものは、神を畏おそれる罪人つみびとに、巧みな妥協案を示唆してくれる。彼は蜜の入った容器みだの蓋を開けないで、何度も周囲を廻めぐってみて、最後にようやく隙間すきまを見つけ出すと、可能な限り吸いとろうとする。

99. 偉大な誇りには、ちっぽけな虚栄心から我々を救ってくれる功德がある。

100. 傲慢な人間が冒す危険は、孤立状態を繰り返すことによって、井戸の底に落ちてしまった人間が、自分の頭の上に見るほんの僅かの空を眺めて、世界を判断しようとするような結果に終ることである。
- ***
101. ことばの上では、恋しないで生きることができるが、愛の体験は必要である。
- ***
102. 恋そのものは、宝庫ではない。しかし、すべての宝庫を開ける鍵ではある。
- ***
103. 最高の温度を経験したものの、それは繊細な磁器と気高い心である。
- ***
104. 過ちは、我々の感情の秤の目盛を零に戻す。しかし、その過ちを速やかに反省することで、零は百萬にも為りうる。
- ***
105. 好機にめぐり合わなければ、完璧であることなど、単なることばの綾に過ぎない。しかるべき機会に、本来の実力を発揮すること、これが、まさに完璧ということである。

註および参考文献

本稿で使用したテキストは、Neera [Anna Radius Zuccari] (1846-1918), *Fotografie matrimoniali* (N. Giannotta, Catania 1900) で、その最終章 (p. 152-p. 195) を試みに邦訳・紹介してみた。イタリア語学習教材としての教育的効用を考慮して、本註記部分にイタリア語原文を掲げることとする。

さて、母親譲りの勝気な黒髪の才媛アンナ・ラディウス・ズッカリはミラノ市の出身で、20世紀の初年、筆名〈ネーラ〉によって、すでに著名な流行作家のひとりであった。稀にしか〈めでたしめでたし〉で結末を迎えることのない作品ばかりを書いて、悲観論者のレッテルを貼られたかという、そうでもなく、登場人物には女性詩人としての暖かい心情がよく反映されているという。習作的小説『巢』でデビューして以来、美貌の女性主人公の理知的な内面の微妙な装まで繊細な筆致で描くスタイルを自分のものにする、ますますモダンな文体で長編小説作家として名声を確立するまでになったが、森鷗外も言及している当時著名だったイタリアの生理学者マンテガッツァと公衆衛生関係の啓蒙書を執筆し、子育てからイデオロギー問題に至るまで実に多彩な著述活動を展開したという。1920年まで生前発表された諸作品は、多くの外国語に翻訳され、しかるべき評価を得ているが、本稿で試訳した一篇もネーラの真骨頂がうかがわれる斬新な文学形式によってい

る。

もとより箴言文学は、フランスではモンテーニュ Michel de Montaigne (1533-92) 著『随想録』、パスカル Blaise Pascal (1623-62) 著『瞑想録』、ラ・ロシュフコー Francois VI, Duc de La Rochefoucauld (1613-80) 著『箴言』などによって、モラリスト文学のジャンルとしてすでに市民権を得ているがゆえに、ネーラのような傑出したベル・エポックの閨秀作家がこのジャンルに挑戦してみたのは至極当然の成り行きに思われる。

1. Il primo amante di una donna è come il capostipite di una famiglia: tutti gli altri dipendono da lui. Se è stato sfortunato lo vendicano e lo fanno rimpiangere; se fu meschino lo rimettono al suo posto; in ogni caso serve di pietra di paragone e le donne hanno una facoltà speciale per tenere uniti questi anelli differenti che formano in molti casi la collana più gradita del loro scrigno.
2. Si è sempre detto che la donna sa amare più dell' uomo. Ciò dipende in gran parte dall' attitudine che ella ha di diluire in un grosso bicchier d' acqua quello che l' uomo condensa in una goccia.
3. Il pensiero innalza l' uomo, il sentimento innalza la donna e riuniti formano il più alto grado della perfezione; ma questa al pari della scala di Giacobbe non è popolata che da angeli.
4. Il rispetto è senza alcun dubbio la maggior prova d' amore per parte di un uomo. Disgraziatamente non è sempre la più apprezzata.
5. In fatto di bellezza ogni donna, nel suo intimo convincimento, non ammette che quella che possiede lei stessa.
6. L' ironia che sembra frutto di poco sentimento è il più delle volte un risultato di germi assolutamente contrari. L' ironia è fatta di lagrime congelate.
7. Le donne che hanno amato e che sono state amate molto, conservano intorno a loro fino al limite della vecchiaia come un odore di polvere bruciata del quale molte approfittano per illudersi ancora di far la guerra.
8. La gelosia, purtroppo, è la compagna dell' amore ma nello stesso modo che la malattia accompagna l' uomo. L' ideale dell' amore deve essere senza sospetti come l' ideale della vita senza malanni.
9. Il conseguimento della felicità non è lo scopo massimo dell' amore. Ogni innamorato è anzitutto un curioso.
10. Non è per ipocrisia che una donna nasconde in pubblico i suoi sentimenti: è per pudore. Questa delicatezza fu compresa benissimo da un alto poeta quando pose sulle labbra della sua eroina questi versi celebri: « Cara, segreta, ignota al sol, romita, Vive la cura che m' accende il cor. »
11. Le donne vane e leggere si vestono del loro amore come di un cappellino o di una mantiglia, e sciorinano i loro sentimenti come il tacchino la sua coda.
12. Ama poco chi molto ciarla.
13. C' è negli amori segreti, gelosamente custoditi, una grazia misteriosa di flora sottomarina che pure accogliendo in sé i germi della vita animale, si espande in una fioritura di petali e di steli.
14. La parola Ideale è adoperata per indicare il più alto grado di aspirazione in un individuo; ma non bisogna dimenticare che il più alto grado dell' uno è talvolta l' infimo scalino di un altro.
15. La strada della perfezione non è un sentiero dritto e soleggiato di cui ognuno può scorgere la meta; è una viottola buia, erta e scabrosa dove bisogna procedere a tentoni, urtando spesso la fronte e lacerandosi i piedi.
16. Gli uomini che si tengono sicuri della loro conoscenza della donna per le esperienze fatte sulle donne galanti, mi fanno pensare a un viaggiatore che per aver visitato l' ospedale di una città volesse concludere che tutti gli abitanti sono ammalati.
17. Coloro che affermano essere il mondo una accolta di vizi e di brutture, hanno dimenticato le

conquiste della religione, della scienza, dell' arte, conquiste che non si sarebbero fatte se gli uomini fossero tutti egoisti, viziosi e cretini.

18. Alcuni uomini, ignari delle alti fonti della compassione, sciupano quel poco di cui possono disporre per le donne perdute. Mi fanno l' effetto di uno che avendo un solo tozzo di pane lo desse ad un cane.
19. Una donna può dire ad un uomo: briccone oppure barbaro oppure impertinente oppure ipocrita, senza che la causa di lui sia affatto perduta. Ma se gli dice: imbecille, non c' è più niente a fare.
20. Ciò che vi è di più eloquente negli uragani è il tuono, nell' amore il silenzio.
21. Un amore somiglia ad un altro amore, come una faccia somiglia ad un' altra faccia. Ma ogni faccia ha la propria espressione ed ogni amore il proprio sentimento.
22. L' espressione in un volto è metà della bellezza; il sentimento in amore è la bellezza tutta intera.
23. Nelle partite d' onore, chiamate volgarmente duelli, i due competitori tentano prima di uccidersi e poi si abbracciano. In amore, duello qualche volta più serio, si abbraccia prima e si uccide poi.
24. Mai, sempre, in grammatica sono avverbi per tutti i tempi. In amore non rappresentano che il tempo presente.
25. La fedeltà, per essere chiamata virtù, deve attaccarsi a un oggetto degno. Ravvedersi dell' errore è in caso contrario più virtuoso che il persistervi.
26. Il successo è la pietra di paragone dell' ingegno perchè è lo scoglio dei mediocri i quali vi naufragano irremissibilmente.
27. Molti chiedono agli scrittori: Perchè non vi ispirate ai grandi ideali del socialismo? Perchè non scrivete romanzi sulle classi diseredate? Ciò mi fa lo stesso effetto di una donna che se ne andasse attorno chiedendo agli uomini: Perchè non vi innamorate di me?
28. Vi sono parole sublimi che cadendo in un orecchio indifferente si perdono: ve ne sono altre, affatto vuote, che ad un orecchio preparato sembrano sublimi.
29. L' orgoglio, quando non sia un giusto moderatore fra il cuore e il cervello, corre il rischio di fare come la spuma dello sciampagna la quale ricade sul piede del bicchiere.
30. Amare le bestie, quando si ha la scelta fra gli uomini e Dio, non è cosa che onora nè che giova.
31. Saper far soffrire a suo tempo è uno dei segreti per farsi amare.
32. Di tre cose ha bisogno la donna: di un amante, di un padrone, di un consigliere; l' amante per la sua immaginazione, il padrone per i suoi sensi, il consigliere per il suo cuore.
33. Il più veggente fra gli uomini ha un giorno nella vita in cui le sue passioni gli pongono un velo sugli occhi.
34. Una donna che non ha mai pianto non è donna che a metà.
35. Se una donna è bella deve prepararsi ad avere in ogni uomo un nemico, perchè egli la corteggerà, ed allora, una delle due: o gli corrisponde e corre i pericoli dell' amore o lo respinge e corre i pericoli della vendetta.
36. Le donne che piacciono alle altre donne sono in generale quelle che non piacciono agli uomini.
37. L' ingegno si ammira, la bellezza piace, la grazia seduce, la bontà commuove, il criterio persuade; ma nessuna di queste qualità presa separatamente basta a suscitare quel sentimento così misterioso e così complesso che dicesi simpatia. Esso è un segreto della natura.
38. L' amore che giunge all' indifferenza prima di attraversare una fase d' odio, è un povero amore.
39. L' amore non dura, è fatale; ma si rinnova e ciò è più fatale ancora.
40. L' amore ideale esiste, ma non si può stringere nè incatenare e conservarlo eternamente. Bisogna accontentarsi di averlo in uno sguardo, in una stretta di mano, in una lagrima, in un sorriso, nel momento che fugge, nel palpito che vibra e passa. Non più in là.

41. Quando il sentimento sopravvive all' istinto brutale acquista una delicatezza somma, come un' anfora in cui siano state chiuse delle essenze, ma dove non resta che il profumo.
42. Sopra cento persone cinque sono indifferenti all' amore; quarantacinque vorrebbero amare; ventinove vi si provano; venti credono di riuscirci; una ama.
43. Le sole illusioni che tutte conserviamo sono quelle che ci facciamo sopra noi stessi.
44. Il vero amore è come un palazzo senza scala. . . Per salirvi bisogna avere le ali.
45. Un vero bacio nè si chiede nè si ruba; deve essere lo scatto irresistibile ed unisono di due desideri a lungo compressi.
46. Tutto ciò che si frena, che si soffoca, che si nasconde, torna a vantaggio dell' amore.
47. La simpatia può essere subitanea, ma il vero e grande amore ha bisogno del tempo per affermarsi.
48. Coloro i quali non fanno altro che vedersi, piacersi e ottenersi, possono dire bensì di aver avuto l' amore, ma allo stesso modo dei viaggiatori che salgono le Alpi in funicolare. Toccano la vetta senza conoscere la montagna.
49. L' amore può morire tanto di fame come di indigestione. Tutto sta a sapere qual' è la morte migliore.
50. Vi sono tre tempi in amore. Tempo primo: quando le parole « t' amo » escono contemporaneamente dalle due bocche. Tempo secondo: quando l' uno domanda « mi ami? » e l' altro risponde « sì. » Tempo terzo: quando alla domanda ' « mi ami? » ' viene risposto: « ma lo sai! »
51. Tra due persone che si amano la più forte è quella che ama meno.
52. È curioso ad osservarsi come, allorquando si tratta di donne, gli uomini confondono il significato della parola buona. Per essi è buona la donna che risponde al loro amore, senza riflettere che tale concessione non si fa mai per bontà, ma nel caso migliore per simpatia.
53. La ragione dell' amore sfugge a qualsiasi analisi. Si potrà dire quanto e come si ama, mai perchè.
54. Il mondo è così pieno di poveri, di brutti, di sciocchi, che chi ha ricchezza, bellezza od ingegno deve impiegare tutte le sue forze a farseli perdonare.
55. L' entusiasmo che alcuni ignoranti hanno per le persone superiori non dipende altro che da questo: che la persona superiore li ha persuasi di essere fratelli.
56. Una donna che ha molti successi, se non vuole essere morsiata dall' invidia, farà bene a nascondersi più che può, per mettersi almeno apparentemente nella stessa condizione di quelle che non ne hanno.
57. Pensando a tutto ciò che la religione, la morale, la società, la famiglia, la natura stessa esigono dalla donna vien fatto di esclamare: A buon conto nessun uomo vorrebbe essere donna!
58. Si continua a dire il sesso debole come si dice il sorgere del sole, quantunque sia positivamente provato che il sole nè sorge nè tramonta.
59. I poeti sono senza dubbio coloro che meglio parlano d' amore, ma non sono affatto quelli che amano meglio.
60. Molte volte, in amore, invece di accarezzare si morde. Molte volte la parola affettuosa viene strozzata da un non so che di aspro e di violento che rassomiglia all' odio.
61. Chi ha molto sviluppato l' amore di sè stesso non può veramente amare. Esempio: i ghiottoni, gli ambiziosi, gli avari.
62. In amore non vi sono atei. Vi sono appena convertiti e convertibili.
63. Si potrebbe dire che nel lambiccò dell' amore non vi sono che due sapori. Quando il dolce, che sta in cima, per una ragione qualsiasi si decompone, l' amaro dal fondo sale rapidamente.
64. Tutte le passioni si assomigliano. Il piacere che esse ci danno non è che quello che noi vogliamo

- attribuir loro.
65. Quando sento dire che un amore si è spento improvvisamente per l' effetto di un disinganno, penso a certe macchie che spariscono dietro l' applicazione della benzina per ricomparire mezz' ora dopo.
 66. Le persone ingenuie credono che in amore tutto sia tenerezza e dolcezza, mentre non vi è amore al mondo che non faccia spargere tante lagrime almeno quanto abbia dischiuso di sorrisi.
 67. Troppe volte l' amore somiglia a quel balocco giapponese che si presenta come una grande scatola, dove se ne trova un' altra, e un' altra e un' altra ancora; dieci, quindici, sempre digradanti in misura, finchè l' ultima è così piccina che non potrebbe contenere neppure un bocciuolo di rosa.
 68. L' ideale non è altro che quello che si vede in lontananza.
 69. Le virtù accrescono le forze dell' amore. Esso che è tutto grandezza non germoglia a suo agio che nelle anime grandi.
 70. Quando, dopo molti giorni di pioggia i ciottoli del selciato si mostrano purificati dalla polvere e dalla lordura, noi possiamo discernere in esse il quarzo, il granito, la silice: così le lagrime detergono i cuori e sotto di esse prendono risalto le buone e le cattive qualità dell' animo.
 71. È un grave torto il considerare l' amore una cosa comune, accessibile a tutti. Si dovrebbe invece prepararsi come al compimento di un alto e religioso mistero.
 72. Il grado più alto di una religione è sempre quello dove il culto raggiunge l' amore e il grado più alto dell' amore è quando l' adorazione si fa religiosa.
 73. I pagani credettero di far molto facendo nascere amore da Venere; i cristiani vanno molto più in là: essi lo traggono direttamente da Dio.
 74. Le donne diranno male volentieri di una data donna, ma non mai delle donne in genere. Gli uomini sono in questo più generosi, difendono tanto il sesso quanto l' individuo.
 75. Gli antipatici, nella maggior parte dei casi, sono sinceri; è facile capire che mentirebbero volentieri. Coi simpatici invece non si è egualmente sicuri ed è buono ricordarsi che non è tutto oro quel che luce.
 76. Spunta naturalmente sul pendio delle alpi una povera rosellina che, vista in bottone, per il colore, la forma e la freschezza si può scambiare con una rosa di giardino. Solo quando si apre mostra le sue quattro foglie meschine, senza profumo e che avvizziscono subito. Sarebbero dunque le rose come le donne che si conoscono alla sboccatura?
 77. Non si è mai riusciti a stabilire con esattezza se ciò che forma il maggior fascino dell' amore sia la simpatia che si prova o quella che si ispira.
 78. Un piccolo amore, il simulacro di questo sentimento, offende una donna sensibile. Il grande amore invece trova in sè la propria assoluzione, la discolpa presso gli altri e spesso il compenso da chi ne è l' oggetto.
 79. Quanto sperpero d' amore fanno quotidianamente le anime sensibili! E come ne avvantaggerebbe l' equilibrio della società se quello sperpero si potesse raccogliere e disporre a beneficio degli indifferenti.
 80. Quando di una persona piacciono solamente le qualità si tratta di ammirazione semplice; ma quando piacciono anche i difetti, acqua, padre! . . .
 81. Il no e il si non hanno sempre in amore lo stesso significato. Vi sono dei si senza convinzione e vi sono dei no che affermano, confermano e rafforzano.
 82. In amore le gradazioni valgono più dei colori.
 83. Le donne hanno questo di comune col vino che, se la qualità è buona invecchiando migliora.

- Fatalmente l'alterazione è tanto facile per il vino quanto per le donne.
84. Le donne pensano coi sensi, amano col cuore, soffrono coll'immaginazione.
 85. Ciò che determina una simpatia, non è forse tanto la sovrabbondanza di certe qualità, come la mancanza di certi difetti.
 86. Vi è un tempo in cui la persona amata, pronunciando parole comuni come: « pane, cacio, scarpe » ha l'aria di dire delle idealità, e ve n'è un altro, durante il quale le parole « amore, luce, vita » non sembrano più nella sua bocca che cose triviali e scipite. Il primo tempo corrisponde a quello che con una parola si intende tutto; il secondo, a quell'altro in cui cento pagine non riescono a spiegare nulla.
 87. Lo scoglio di tutte le affezioni è la intimità; ma siccome ne è pure lo scopo diretto, è qui che si deve cercare l'origine d'ogni disinganno.
 88. L'amor proprio, nell'uomo, prevale sull'amore. Se qualche volta sembra cedere, se si inchina alla donna, è solamente in un caso consimile di quando, avendo sete, si abbassa alla fonte per bere.
 89. La rarità del gusto per i piaceri dell'immaginazione è una prova che essi sono superiori agli altri.
 90. Nelle relazioni tra uomo e donna, il significato delle parole è spesso sconvolto. Comprendere vuol dire sentire; credere, sperare; e col medesimo procedimento, bellezza corrisponde a desiderio; idealità a mistero; ardore a resistenza; piacere a novità. Quasi mai amore corrisponde perfettamente ad amore.
 91. È una triste necessità dell'amore quella di far soffrire. Se non direttamente, sarà indirettamente, ma ciò è inevitabile.
 92. L'amore, sulla scena del mondo, è come un attore che rappresenta tutte le parti. Ora lo vediamo fare da re, ora da schiavo, ora da tiranno, ora da vittima; e si produce con eguale successo nelle farse, nelle commedie e nelle tragedie.
 93. Avviene nelle relazioni amorose quel che avviene nel fare la calza. Quando cade un punto bisogna raccattarlo subito, altrimenti tutto il lavoro rimane sciupato.
 94. Qualunque persona può avere un lato generoso, perchè siamo tutti generosi nelle cose di cui non ci importa nulla.
 95. I sacrifici più meritori sono i sacrifici incompresi.
 96. Rade sono le calzature a cui non si sciupi prima la suola che il tomaio, ovvero prima il tomaio che la suola: così nell'accordo di due persone difficili è il caso che giungano alla fine senza tacconature o da una parte o dall'altra.
 97. Il poeta non è mai in così buona compagnia come quando è solo.
 98. Gli amori vietati suggeriscono al peccatore timorato delle ingegnose transazioni. Egli non apre il barattolo del miele, ma gira tanto intorno che finisce col trovarsi una fessura, ed allora succhia più che può.
 99. Un grande orgoglio ha questo di buono che ci salva dalle piccole vanità.
 100. Il pericolo dell'orgoglioso è che, a furia di isolarsi, finisce come un uomo che fosse caduto in fondo a un pozzo e volesse giudicare il mondo da quel pezzettino di cielo che vede sul suo capo.
 101. Si può a rigor di termine vivere senza amore, ma è necessario aver amato.
 102. Non è che l'amore sia per sè stesso un tesoro, ma è la chiave che apre tutti i tesori.
 103. Le porcellane fine ed i cuori elevati sono quelli che hanno attraversato la più alta temperatura.
 104. Uno sbaglio mette uno zero nel nostro bilancio sentimentale, ma un ravvedimento a tempo può cambiare lo zero in un milione.
 105. La perfezione è una parola vana se non si congiunge alla opportunità. Essere ciò che dobbiamo in un dato momento: ecco la perfezione.

